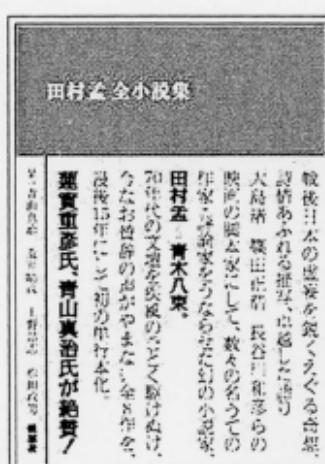


心に響く死者の記憶

紅野 謙介（日本大教授・日本文学）

- ①『田村孟全小説集』 (航思社)
②石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』 (藤原書店)
③小川国夫『俺たちが十九の時 小川国夫初期作品集』 (新潮社)



今月のおすすめは、『週刊読書人』十一月九日号に掲載された足立正生・荒井晴彦の対談「追悼・若松孝二」。ピング映画の旗手から、なぜか文化人になってしまった晩年の若松をめぐって、かつての協働制作者たちが語り合う。

六〇年代以降の前衛映画運動の軌跡が愛情と批判をこめて語られ、心に響いた。

そんなこともあって死者の記憶にまつわる三冊。①は大島渚や長谷川和彦の映画の脚本家でもあった亡き田村孟の小説集。あの田村孟が七〇年代前半に青木八束の名前で小説を書いていた。読んで愕する。中上健次がすでにここにいた。映画「青春の殺人者」のこと思い出した。

②は石牟礼道子による高群

逸枝論。これも六〇年代から七〇年代に書き継がれたものを初めて本にした。四十年の歳月を超えて、縋り合わされた高群や夫・橋本憲三の記憶。同時にそこに石牟礼の時間も縫い込まれている。

③は四年前に亡くなった小川国夫のみずみずしい初期短篇集。『アポロンの島』以前の著者がここにいる。半年前に出了小川恵『銀色の月 小川国夫との日々』(岩波書店)とともに読み味わいたい。